

佳作

テーマ1..医療と福祉、わたしの体験 「一人じゃないよ」

福岡県立八女高等学校3年 田中花

「さっき生まれたよ。」

十一年前の夏、弟が生まれた。病院から帰宅した祖母が声高に教えてくれたが、どこか不安も入り交じった表情だった。その表情の意味は、祖母が見せてくれた弟の写真を見た瞬間、一目瞭然だった。

弟は予定日より三ヶ月早く、在胎二十七週三日で極低出生体重児として生まれたのだ。写真で初めて見る生まれたばかりの弟。小さな体には沢山の管や機械が繋がれていた。当時、小学一年生だった私が見ても「痛そう」「可哀想。」と感じる程だった。しかしそれら全ては、弟の小さな命を繋ぐために欠かせないものだとすることを、祖母が教えてくれた。

弟は、生まれた瞬間からNICUという新生児集中治療室での入院治療が始まった。弟に会うことが出来るのは、両親と祖父母だけに限られていた。毎日、面会に行った母から「今日は何cccミルク飲んだよ。」「点滴の管が一つ外れたよ。」など、その日の弟の様子を聞くことが日課であり、会えない分楽しみだった。

しかし、弟が生まれて一ヶ月が過ぎた頃、初めて弟に会える日が訪れた。病院が取り組んでいる「きょうだい面会」というものを体験させてもらえることになったのだ。しばらくは会えないと思っていただけ、嬉しい気持ちで当日を迎えた。初めて見るNICUという場所。沢山の保育器が並んでいた。部屋全体は暗く全ての保育器の周りには沢山の機械が並び、色々な所からアラーム音が聞こえていた。比較的状态が安定している弟が過ごす保育器は、一番奥にあった。遂に弟の保育器の前に立った。沢山の管に繋がれている写真を見ていた父、実際はどんな感じなのだろう。どのくらいの大きさなんだろう。そう思いながら、楽しみと同時に恐る恐る保育器を覗き込んだ。思っていたよりも、すごく小さ

な弟が保育器の中で気持ちよさそうに眠っていた。あまりの小ささや手足の細さに驚いたが、初めて間近に弟の顔を見ると喜びが溢れてきた。「可愛い。咄嗟にそう呟いたのを今でも鮮明に覚えている。担当の看護師さんが、弟の状況や、弟に繋がる管や機械が何の為なのか、一つ一つ私達にわかる言葉で教えてくれた。看護師さんが説明の合間に何度も、普段の弟の仕草や様子に対して「可愛い」という言葉を使ってくれていて、医療行為だけでなく、私や両親に代わり我が子のように弟のお世話をしてくれていることが伝わってきた。その思いがすごく嬉しかった。私はずっと、小さな弟が一人で入院していることに対し、可哀想だと感じていた。しかしこの日、看護師さんや主治医の先生の話聞いて、弟は一人ではないこと、私達家族同様に弟の成長を楽しみにしてくれている人がいること、沢山の人の愛情を受けていることがわかった。それは弟の寝顔にも十分表れていた。面会の最後には、保育器の中の弟に触れさせてもらうこともできた。私の指ほどの細さの腕や太ももに恐る恐る触れた。とても温かかった。すると弟が、私が伸ばした指を、小さな小さな手でぎゅっと握ってくれた。とても力強かった。「お家で待ってるね。早く帰って来てね。」弟にそう声を掛け、帰宅した。

病気を治す、病気を治す補助をする、それが医療だと思っていた。もちろん、それが一番重要なことだと考える。しかし、弟が極低出生体重児として生まれたことを始めとし、小さな弟に面会させてもらえた貴重な体験で、それだけではないことに気付いた。患者や患者を大切に思う家族が安心して治療を受けられるよう寄り添うこと、治療に対する心配を可能な限り払拭すること、そういう心で医療を提供することが、共に患者の回復を喜び、より良い医療を提供することが出来る。患者や家族との信頼関係も構築出来るということを、この時の貴重な体験から学んだ。

そして今、同じような思いを伝えられる医療従事者になることが私の目標である。